

2014年のアンボン情勢について

—紛争・和解と地域伝統—

河野 佳春*

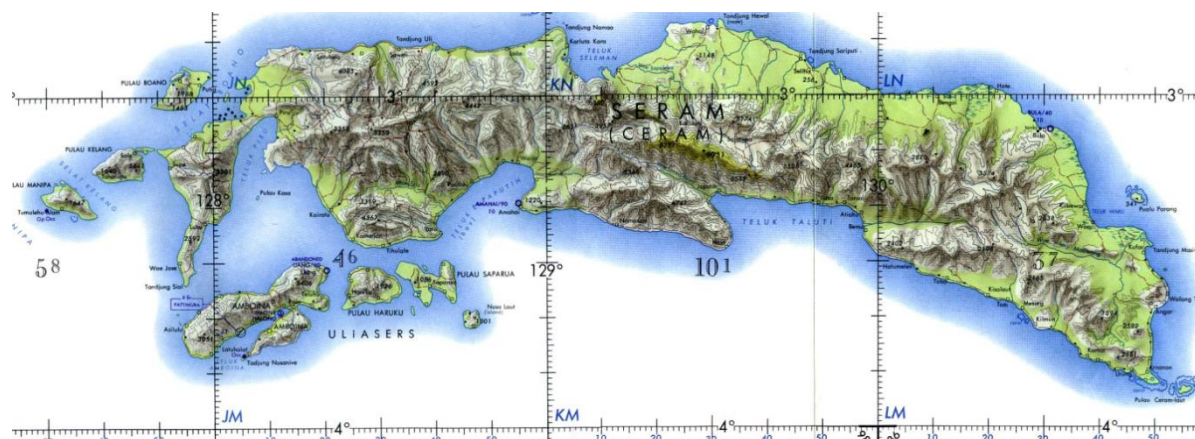
Ambon's Political Situation in 2014.

—Conflict, Reconciliation and Tradition—

Yoshiharu Kawano *

Abstract

This paper is a sketch of Ambon's political situation in Nov. 2014. In this region from 1999 to about 2004, most of the inhabitants and many strangers were divided into a Moslem and a Christian group and struggled against each other. As a result, many people were killed and injured, and became refugees. At present the conflict seems resolved, but many people have strong suspicions against people with the other faith. So they have many weapons even now. In the last few years, however, non-religious conflicts in the same religion have happened more often than conflicts between religions. At Saparua island, villagers of Port and Haria fought against each other, and they are all Christians. There also was a cruel conflict for a few years among Moslems in Pelau village on Haruku island. Many people of Ambon say that the tradition of Pela-Gandung was very useful for a reconciliation, but, in practice, there were some cases where the tradition was not useful for a reconciliation. On Seram island Dec. 2012, Kamarian villages attacked Huaroi village because Haoroi villagers had attacked Sepa villagers who are Pela partner of Kamarian..



地図1. アンボン周辺

1. はじめに

1. 1 アンボンという地域

本稿はインドネシア共和国アンボン地域における、最近の政治情勢についての素描である。ただしアンボン地域という時、必ずしもその範囲は自明ではない。筆者の場合、マルク諸島中部のアンボン島、およびそれに隣接するルアシ諸島、さらにこれら小島群の北に位置する大島セラムの西南岸地域を指している。(地図 1. 参照)

マルク諸島は、北部のテルナテ島ティドーレ島周辺が丁子の、南部バンダ諸島が肉荳蔻の原産地で、古くから交易が盛んであった。アンボン地域はもともとこれら香料を産せず、マルク諸島内では周辺地域であったが、欧州人が来航し始めた十六世紀ごろに、北部の影響下に丁子栽培が始まり、その後まずポルトガル、次いでオランダが交易の拠点として以降栄え、同諸島の政治的経済的中心となり現在に至っている。

ポルトガル支配下でキリスト教布教がはじまり、その後オランダ支配時代を通じて次第にキリスト教徒が増加し、さらに 19 世紀末アチェ戦争が背景となって、この地域から多数のキリスト教徒が植民地軍兵士となるようになり、キリスト教多数地域との印象が一般的である。また、インドネシア共和国独立に際しては、元植民地軍兵士らが中心となって初めは独立反対の後には親オランダ的な南マルク共和国建国の運動を展開し、最終的にインドネシア軍による武力鎮圧を受け、彼らがオランダに亡命したため、彼らがキリスト教徒の中でも少数派に過ぎなかったにも拘らず、親オランダの地域との誤解を受けた。

しかし実際には、植民地時代末期においても現在でも、「アンボン人」のキリスト教徒とムスリムの人口比は拮抗している。なお、キリスト教とイスラムの到来は、わずかにイスラムが早く、それ以前からの土着信仰はアニミズム的なもので、現在もそれを保持する人々は、少数ながら主にセラム島内陸に居住し、アリフルあるいはヒンドゥー等と呼称される。

また、十七世紀以降交易の中心として栄えたこともあり、スラウェシ南部および東南部など周辺との交流も盛んで、マカッサル人ブトン人は早くから往来あるいは移民した。独立後はジャワからの出稼ぎや移民も多く、人口に占めるムスリムの比率は一層高まっている。

1. 2 1999 年紛争から現在のアンボン

近年におけるこの地域を考えると、避けることができないのが、1999 年 1 月に始まった地域紛争である。

ささいな喧嘩から始まった紛争は、瞬く間に地域をキリスト教徒とムスリムに二分する激しい殺戮に発展した。

同年 2 月軍が本格的に投入されたが、事態は沈静化せず、5 月にはジャワなど地域外からのムスリム義勇兵が大量に流入し、紛争は一層激しさを増した。最終的に死者は数千人、難民も 20 万人以上に及んだ。

このような紛争の激化に際して、地域内でも全インドネシア的にも、ロコミからマスメディアまで、さまざまなレベルで、対立を煽る流言蜚語が飛び交ったが、状況から見て軍の少なくともその一部による意図的情報操作、煽動工作があったことは疑いようも無い。

事態がようやく収拾に向かったのは、2001 年に入ってからで、安全地帯の設定や安全地帯内での学校や市場の再開が実現した。2002 年 2 月政治家・宗教指導者・村落首長らが、マリノ II 合意を結んでいこうは、さまざまな紆余曲折を経つつも、情勢は沈静化へ向かった。

現時点で最近の激しい宗教対立は、2011 年 9 月 11 日の 911 暴動に始まった、アンボン市内での一連の衝突である。死者は 7 人だったが、4000 人以上が一時的に避難生活を強いられ、1 ヶ月以上の間市民生活は半ばかつての紛争状況に逆戻りしたかのような緊張状態となった。

一人のムスリムの交通事故死をきっかけに、流言蜚語が飛び交い、キリスト教徒とムスリムが、たとえ互いに少数だったとしても、激しい衝突にいたったことは、この地域における宗教紛争の危険性の高さと、住民自身の自覚を物語っている。実際多くの住民が、いまだに大量の武器弾薬等を隠し持っている事実は、その証である。

以上に述べたように、宗教対立ははまだ地域において重大な危険性を孕んでいるが、2002 年 2 月のマリノ II 合意以降は、キリスト教徒とムスリムとの紛争事件は稀にしか発生せず、むしろキリスト教徒同士、ムスリム同士の紛争事件が多数発生するようになった。それらのほとんどはアンボン市街地ではなく、村落地域における隣接する村落間の紛争である。しかし、中には同一村落内で住民同士が争う場合や、地理的に離れた村落同士が争った例もある。

1. 3 和解と伝統復興

当然ながら 1999 年 1 月の紛争発生以降、紛争の沈静化・終結と人々の和解が、アンボン地域社会における最重要問題であったが、地域内外で平和を望むあらゆる人々が、この間一貫してペラーグンドゥンと呼ばれる地域伝統の重要性と、その復興の必要性を指摘した。

ペラーガンドゥンは、二つ以上の村落間の慣習的同盟であり、実際に共通の祖先を持つ血縁関係や、過去の歴史的いきさつに基づくものと説明される。同盟する村同士は、定期的に儀礼を行い関係を維持強化し、さまざまなやり方で互いに助け合うが、本来的にその関係は村落間戦争における共同防衛のための同盟である。

紛争発生以前においても、ペラーガンドゥンは地域における重要な伝統とみなされ、その結びつきは強固なものと考えられていた。実際に1999年の紛争拡大を防げなかったことに対して多くの人が失望を表明したほどである。

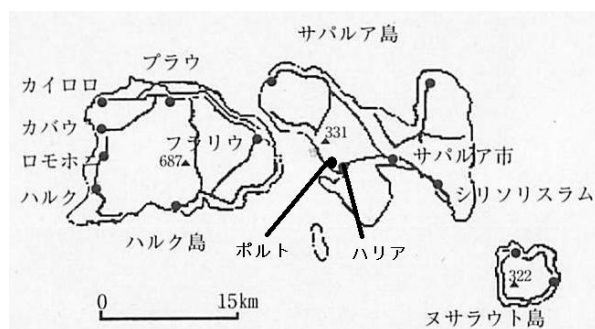
実際の和平構築過程においては、伝統的な個々のペラーガンドゥンの確認強化が図られるとともに、失われたペラーガンドゥンの発掘再生や、新しいペラーガンドゥンの構築なども行われた。

さらにそれら個々のペラーガンドゥンの集積として、あるいはそれらを超えたものとして、地域の全住民を統合する、ペラーガンドゥン精神とでも言うべき伝統の存在が盛んに宣伝されている。

このようなペラーガンドゥンの確認・強化・再生・新設・宣伝は、紛争の終結と和平構築、人々の和解に大きく寄与したことは間違いないと、筆者も考える。しかし当然、ペラーガンドゥンも万能ではないし、完全でもありえない。

特に近年、宗教紛争にかかわって、地域における紛争事例の多数を占めるようになった、同一宗教信者間の村落紛争において、やはりペラーガンドゥンによる和平の構築が目指されているが、その成果ははかばかしいものではない。

そもそもペラーガンドゥンが本来的には村落戦争における共同防衛のための同盟である以上、それは論理的には和平に役立つと同時に、あるいはそれ以上に戦いを引き起こし激化させる役割をも果たしうる。そして残念ながら実際にそのような事例も存在する。以下では村落紛争の事例を4つ紹介する。



地図2. ルアン諸島

2. ポルト村ハリア村紛争

2.1 ポルト村ハリア村紛争の経過

この紛争は、ルアン諸島サパルア島西岸に完全に隣接する二つのキリスト教徒村落間の争いである。(地図2.) 隣接するというより実際には地理的には完全につながった一つの集落だが、植民地時代以前から、明確に二つの村に分かれて暮らしてきた。

紛争の経過を新聞報道に基づき、時系列にしたがって整理すると以下の通りである。

2002年4月10日

両村住民が衝突、死者3人負傷者44人焼失家屋44棟⁽¹⁾

2011年8月23, 25日

両村住民が衝突、手製爆弾を使用。⁽²⁾

2011年8月27日

両村内で2度の爆発。原因は水源の争い。⁽³⁾

2011年9月2日

両村で数度の爆発。⁽⁴⁾

2011年11月26日

両村住民衝突、銃や爆弾使用。⁽⁵⁾

2011年12月2日

両村住民衝突、2名死亡。⁽⁶⁾

2011年12月3日

ポルト港で、武器密輸業者逮捕。⁽⁷⁾

2011年12月5日

和解成立、10年来の紛争終結。⁽⁸⁾

2012年2月8日

両村住民衝突、銃撃と爆弾で2名負傷。

係争中の井戸周辺の樹木にポルト側が2月3日に設定したサン(伝統慣習による収穫禁止)を、5日にハリア住民が破ったことが背景。⁽⁹⁾

2012年2月10日

両村住民衝突、銃撃で1名死亡2名重傷、爆弾でも1名重傷。⁽¹⁰⁾

2012年2月16日

当該地域に追加で各一個小隊派遣。⁽¹¹⁾

2012年3月7日

ポルト村ハリア村3/7衝突、銃撃と爆弾で4名負傷、家屋3棟損傷、村境でバス乗客狙撃がきっかけ。⁽¹²⁾

2012年3月8日

州知事現地訪問、徹底取締まり指示。煽動者に銃撃、全ての武器を押収せよ。⁽¹³⁾

2012年3月9日

マルク州庁での和解協議物別れ。

ポルト側の申し入れにハリア側は裁判を主張。⁽¹⁴⁾

現地でハリア住宅1棟爆破。⁽¹⁵⁾

2012年3月10日

マルク州議会副議長発言「紛争には意図的な煽動者が存在。警察・軍は煽動者を銃撃での人権侵害をおそれるな!」⁽¹⁶⁾

2012年4月8日

両村住民衝突。⁽¹⁷⁾

2013年2月28日

両村住民衝突、爆弾で死者2人、警察官詰め所と小学校にも損害。⁽¹⁸⁾

2013年3月16日

ポルト住民当局に武器を提出。警察側は押収と発表。⁽¹⁹⁾

2013年5月2日

両村境界の紛争原因井戸付近で、通りがかりの他村住民が銃撃され、両村住民間に緊張。⁽²⁰⁾

2013年6月5日

アンボン市内の軍集会所で紛争終結のためのセミナー開催。

ポルト村の主張「紛争の拡大には、ハリア村長(ラジャ)とハリア住民アグス・ロウパティが責任があり、さらに(係争地)ラジャ井戸とカルボウ山がポルト村のものであることは、土地記録から明らか。

ハリア村の主張「この紛争は植民地支配の負の遺産。」

「外来の煽動者を警察が処罰するべき」⁽²¹⁾

2013年6月25日

駐アンボン151連隊長を議長に、警察、行政、地域有力者、研究者などで紛争終結のための特別チーム組成。⁽²²⁾

2013年7月16-18日

両村住民衝突、礼拝所と住宅5棟焼失。⁽²³⁾

2.2 紛争長期化の背景について

この紛争は、以上に整理したとおり、筆者が確認しえた範囲でも、2002年4月に始まり2013年7月にいたっても、なお激しい衝突を発生し、2014年に入っては衝突事件の発生を確認していないものの、いまだ明確に終息を見ない。

筆者の考えでは、この紛争に代表される当該時期のアンボン諸村落における紛争は、きわめて特異な紛争である。特に最近数年に限って言えば、国家としてのインドネシアも、当該諸村落の周辺地域たるアンボン地域も、内乱状態にあるわけではなく、外国との戦争状態にあるわけでもなく、概ね政治情勢は安定しており、治安も悪くない。

にも拘らず村落住民同士が、相互に長期間繰り返し暴力的闘争を継続するという事は理解しがたい。この事例は、宗教紛争のまだ激しかった2002年4月に始まり、10年以上にわたって続いている点で、中でも際立っているが、これ以外にも数ヶ月間にわたる村落紛争は多数見られる。⁽²⁴⁾

この間地域社会も行政当局も、ただ事態を見過ごしていたわけではない。前述の通り、この紛争でも警察部隊が駐留し、衝突を防ごうとしたが、それでも衝突は繰り返された。

また、はじめに、述べた宗教紛争の終結・和解に役立てられた、地域伝統の動員は、ここでも試みられた。例えば2012年2月29日にアンボン地域代表協議

会(DPD)議長が以下のように発言している。⁽²⁵⁾

プラウ村やサパルアの紛争は慣習法の弱体化による……我々の社会では法が社会の末端にまで行き届きにくいので、慣習(adat)指導者やコミュニティ指導者の役割が重要である。しかし、地方政府や法律家がこれを忘れてしまうので、紛争が繰り返し替えされる。……実際地域の知恵は祖先の遺産であり、調和を保つ知恵である。

この発言は、州当局が当該紛争の調停に乗り出した2012年3月9日の会合直前の時期の発言であり、ここに州当局がペラーグドゥン慣習など伝統の弱体化に、紛争の原因を見出し、その強化によって紛争を沈静化できるとの考えを読み取ることができる。

しかし結果的には、この見通しは間違いであり、宗教紛争の場合と違い、ペラーグドゥン慣習などの伝統動員による、紛争終結は失敗した、と言わざるを得ない。

なぜ、宗教紛争において有効であった、ペラーグドゥン慣習など伝統による和解が、ここでは上手く行かないのか。この問題に簡単に答えを出すことはできないが、筆者は伝統に対する両村の態度の違いに、糸口があると考えている。

前述したとおり2012年3月9日の会合において、ポルト村は和解協議を申し入れたが、ハリア村はこれを拒絶し、裁判を主張している。⁽²⁶⁾この会合を設定した州当局がペラーグドゥン慣習など伝統の動員をここで考えていたとする、筆者の考えが正しければ、ここでポルト側が提案した協議は、伝統に基づいたものであろう。それに対して裁判は、伝統慣習ではなく、現代の成文法に基づいて行われる。したがって、この段階で伝統的な方法による解決に対して、ポルト村住民は積極的であったが、ハリア村住民らはこれを拒否し、法律による解決を望んだのである。

両者のこのような態度の違いは、2012年2月8日の衝突にも見られる。この事件は、前述の通り紛争原因となった井戸周辺で、ポルト村民が設定したサシを、ハリア住民が破ったことに起因している。⁽²⁷⁾

このサシは、係争中の井戸について、直接では無いが、間接的にポルト住民が権利を主張したものであり、ハリア住民もそのように解釈したものと考えられる。だからこそサシを破ったことが、衝突につながったのである。

つまりここでは、ポルト村民がペラーグドゥン慣習ではないが、やはり伝統的慣習であるサシによって

権利を主張し、ハリア村民はこれを破る、すなわち伝統慣習を否定して見せることで、権利を主張したのである。

さらに、2013年6月5日軍主催の和解セミナーにおいて、ポルト村は土地記録から係争地について権利主張したのに対して、ハリア村は紛争を植民地時代の負の遺産と呼んでいる。

ここでポルト村が根拠とした文書は歴史的な文書であり、伝統慣習の論理において十分に権威を有するものだが、現代の成文法に基づく正式な文書ではない、と筆者は考える。なぜならば、この件について、法的に正式な土地記録が存在するならば、ハリア村は裁判を主張する筈はないし、警察当局はより早期により強力な態度で紛争解決に乗り出したであろう。

そして、この会合でハリア村長は「侵略者がサパルア9カ村首長の権限を組み合わせることで時限爆弾を仕掛けた」とも述べているが、これは伝統自体が間違っただけである、あるいは侵略者（オランダ）によって捻じ曲げられたものであると、主張しているのである。⁽²⁸⁾

現時点で筆者は、ペラーガンドゥン慣習などの伝統慣習が、紛争解決に役立つためには、伝統慣習による解決への、当事者の合意が必要なのではないかと考えている。

3. その他の事例

3.1 プラウ村紛争

プラウ村はルアシ諸島ハルク島北岸に位置し、地域経済活動の中心となる豊かなムスリム村落であり、村というよりもむしろ町と見られる外見を有する。(地図2. 参照)

1999年紛争ではその豊かさゆえに、周辺キリスト教徒村落に大きな損害を与えたが、同村自体も周辺キリスト教村落からの攻撃を受けて多数の住宅を焼失したが、その復興は目覚しく、筆者が同村を二度目に訪問した2009年7月末には、中心部では急ごしらえの住居はかなり少なくなり、コンクリート造りの立派な住居が立ち並んでいました。

ところが、2012年2月11日村内で住民同士が争い、7人が死亡、24人が負傷、住宅300棟が焼失し、4406人が村外へ避難する事態が発生した。当初原因は、村内最大多数派のサランペッシー氏族内での、儀礼の日取りを巡る争いと伝えられた。⁽²⁹⁾

しかし当該紛争が突発的なものでなく、2007年以降の長期的なもので、⁽³⁰⁾ 少なくとも数ヶ月前には中マルク県とマルク州当局が問題を知っていたことが明らかになった。⁽³¹⁾

この紛争ではその後衝突事件は発生していないが、

問題が解決したといえる状況ではない。筆者が訪問した2014年9月10日時点でも、多くの避難者が帰村しておらず、⁽³²⁾ 再建されず廃墟のまま更地のまま、という住宅が多数見られた。(写真参照)



写真1. 住民はアンボンに避難中。



写真2. 無残な焼け跡

ところで、前出の2012年2月29日のアンボン地域代表協議会(DPD)議長発言は、ポルト村ハリア村と同時にプラウ村についても慣習の弱体化による紛争との見方を示しているが、⁽³³⁾ 同村の場合まさに慣習儀礼を巡って紛争が発生しており、それゆえ伝統慣習の強化が、必ずしも紛争防止につながらない場合もあることは明らかである。

ただしこの紛争を、単純な伝統儀礼を巡る諍いと片付けることはできない。紛争発生間もない、2012年2月16日人権のための国民委員会(Komisi Nasional Hak Asasi Manusia: Komnas HAM)はジャカルタの同委員会事務所で記者会見を開き、同委員会の独自調査の結果に基づき、問題の本質は宗教でも慣習でもなく、支配と被支配の対立であり、同村行政を批判する人々は抑圧を受けていたと、主張した。⁽³⁴⁾

この主張が正しいとすれば、同村支配層がその支配に伝統慣習を利用していたこと、それに対して被支配住民に不満が蓄積していたことが想定される。このような状況は、筆者の1920年代同村情勢に関する歴史研究の成果ともよく一致しており、そのような構造が約100年間継続しているということは、考えにくいことではない。(35)

3.2 ママラ村ーモレラ村紛争



地図3. アンボン島

ママラ村とモレラ村は、アンボン島北東部に位置するムスリム村落であり(地図3. 参照)、両村は共同して、アンボン地域で最も有名な祭礼「籌合戦」(Pukul Sapu)を毎年断食明けに行う。この祭りは紛争以前には遠方からも見物客が訪れ、紛争中も継続して開催され、近隣からの見物客は訪れていたという。(36)

したがってこの紛争発生は、筆者にとっても非常に衝撃的であった。2013年1月10日両村住民が衝突、互いに集団で投石した。

原因は、ママラ村の青年が暴行される事件について、ママラ住民らが犯人がモレラ住民を疑ったこととされる。(37)

同年2月25日にパツ村へ向かうママラ村住民が射殺される事件が発生、モレラ村住民による襲撃が疑われている。この事件以降両村住民の多くが移動を船に切り替えたが、さらに3月11日には両村で爆発事件が発生する。(38)

その後しばらく衝突は発生しなかったが、6月24日治安部隊が駐屯していたにも拘らず再び衝突が発生、爆弾が使用され、1人が死亡、13人が負傷し、住宅6棟が放火された。この時点で警察当局は、両村長や地域青年指導者らの協力を得て、和解工作を実施、おそらく伝統慣習の動員による和平が模索された。(39)

また、前述の同年6月25日に結成された、151連隊長を中心としたポルトーハリア紛争解決のための特別チームは、同紛争をも対象とするものであった。(40)

しかしながら、伝統慣習が弱体化しているとは考え難いこの場合も、当局の調停は難航していると思われる。約半年後の12月10日、村境のママラ住宅1棟が放火され、銃や爆弾による衝突に発展、モレラ住民1人が左足に銃創を負った。(41)

3.3 ペラによる紛争事例

最後に、ペラーガンドゥン慣習そのものが原因となった、紛争事例を紹介する。2012年12月29日西セラム県のカマリアン村とファロイ村の間に紛争が発生し、8人が死亡した。(42)

この紛争は、カマリアン村の村長(ラジャ)の就任儀礼に絡んで発生したが、(1)カマリアンでセパ村住民の一人がファロイ住民を殴打(伝聞、別情報もあり)

(2)その後セパ村へ戻るファロイ村通過中のセパ村民らをファロイ村側が襲撃(3)セパ村とペラ関係にあるカマリアン村住民がファロイ村を直接攻撃、という経緯をたどったと言われる。(43)

この紛争はその後長期化したとの情報は無いが、ペラーガンドゥン慣習が直接紛争拡大を引き起こした点で、注目し得る。紛争のさなかでは、おそらくカマリアン住民から「ペラの人々を殺した者は許せない!だから先祖たちが犯人を捕まえるに違いない」との叫びがあがったとされる。「先祖たちが(ペラの敵を)捕まえる」との表現は、まさしくペラーガンドゥン慣習に典型的である。(44)

4. おわりに

以上現在のアンボン地域で繰り返す村落紛争について、ごく一部に過ぎないが事例を紹介し、若干の分析を施してみた。本稿は、宗教紛争の解決に役立ったとされ、現在の村落紛争にもその貢献が期待される、ペラーガンドゥン慣習について、必ずしもこの場合には有効でない可能性を示唆したつもりである。最後に、ペラーガンドゥン慣習の宣伝と宗教紛争の解決に多大な尽力をしてきた、A.ワカノ博士(アンボンイスラム高等専門学校和解調停理事: Direktur Ambon Reconciliation and Mediation IAIN Ambon)の見解を紹介して結びに代えたい。

2013年7月10日地元紙記者に対して博士は、「サパルア島ポルト村ハリア村紛争やアンボン島ママラ村モレラ村紛争解決には、厳密な法手続きの執行が不可欠である」と語っている。(45)

注

- [1] *The Jakarta Post*, 12 Apr. 2002.
- [2] *Ambon Ekspres*, 25 Aug. 2011.
- [3] *The Jakarta Post*, 28 Aug. 2011.
- [4] *Ambon Ekspres*, 8 Sep. 2011.
- [5] *Mediaindonesia.com*, 26 Nov. 2011.
- [6] *Suara Maluku*, 2 Des. 2011.
- [7] *Ambon Ekspres*, 5 Des. 2011.
- [8] *Suara Maluku*, 5 Des. 2011.
- [9] *Ambon Ekspres*, 9 Feb. 2012.
- サシというのは、アンボン地域の代表的
伝統慣習の一つで、果樹や魚介類あるいは漁場などに、
使用禁止収穫禁止を設定する。根本的には各村の村落
始祖の権威に基づくが、現在では所有権の確認に用い
られることが多い。
- [10] *Kompas.com*, 10 Feb. 2012.
- [11] *Ambon Ekspres*, 16 Feb. 2012.
- [12] *Kompas.com*, 8 Mar. 2012, 7 Mar. 2012.
- [13] *Ambon Ekspres*, 9 Mar. 2012.
- [14] *Kompas.com*, 9 Mar. 2012.
- [15] *Ambon Ekspres*, 10 Mar. 2012.
- [16] *Ambon Ekspres*, 12 Mar. 2012.
- [17] *Kompas.com*, 9 Mar. 2012.
- [18] *Kompas.com*, 28 Feb. 2013.
- [19] *Kompas.com*, 16 Mar. 2013.
- [20] *Ambon Ekspres*, 4 May. 2013.
- [21] *Ambon Ekspres*, 7 Jun. 2013.
- [22] *Kompas.com*, 25 Jun. 2013.
- [23] *Seruu.com*, 18 Jul. 2013.
- [24] 本稿で触れたプラウ村の事例、ママラ村とモレ
ラ村の事例以外にも、複数の村落紛争が発生している。
- [25] *suarakarya online*, 1 Mar. 2012.
- 記事の中で記者は議長の発言を、以下のように要約し
ている。「高貴な価値観や地域の知恵が等閑視されて
いるので、紛争が発生する」
- [26] 同[14]。
- [27] 同[9]。
- [28] 同[21]。
- [29] *The Jakarta Post*, 12 Feb. 2012.
- 被害数は、*Ambon Ekspres*, 17 Feb. 2012.
- [30] *Ambon Ekspres*, 15 Feb. 2012.
- [31] *Kompas.com*, 14 Feb. 2012.
- [32] 2012年12月19日にはアンボン市内で、27日
にはジャカルタで、避難民らが行政当局に、紛争直後
に約束された住宅再建支援の履行を要求するデモを行
った。
- Ambon Ekspres*, 20 Dec. 2012.
- INILAH.com*, 27 Dec. 2012.
- [33] 同[25]。
- [34] *Tempo.co*, 17 Feb. 2012.
- [35] 河野佳春「アンボンの村落自治と国民東インド
党」『史学研究』225号、1990年、46ページ。

- 同「初期アンボン同盟をめぐるアンボン地域情勢—
1923年を中心に—」『広島東洋史学報』11号、2006
年、23ページ。
- [36] *Ambon Ekspres*, 27 Dec. 2012.
- 両村はそもそも同じムスリムの隣村で、さらにセラム
島の二つの村と共通のペラ関係にあり、非常に親密な
関係と言える。この点については、
Lembaga kebudayaan Daerah Maluku, *Seri Budaya Pela
- Gandong dari Pulau Ambon*, Ambon, 1997.
- [37] *Ambon Ekspres*, 11 Jan. 2013.
- [38] *Ambon Ekspres*, 26 Feb. 2013.
- Kompas.com*, 28 Feb. 2013.
- Ambon Ekspres*, 13 Mar. 2013.
- [39] *Kompas.com*, 24 Jun. 2013.
- [40] 同[22]。
- [41] *Kompas.com*, 10 Dec. 2013.
- [42] *Kompas.com*, 29 Dec. 2012.
- [43] *Okezone.com*, 30 Dec. 2012.
- [44] *Ambon Ekspres*, 31 Dec. 2012.
- [45] *Ambon Ekspres*, 10 Jul. 2013.